

日本人の音の心象風景

一歳時記に詠み込まれた音環境

九州芸術工科大学助教授 岩宮 眞一郎

まえがき

我々日本人は、元来、環境の中に美的価値を見出す文化を保ってきた民族で、音環境に対しても非常に繊細な感性で接してきた。秋の夜長、虫の音に耳を傾け、小川のせせらぎにさわやかさを覚え、鳥の鳴き声に季節の移ろいを感じてきた。また、このような音に関する鋭い感受性が、風鈴、ししおどし、水琴窟といった、日常生活にアクセントを添えるような、音を楽しむ文化を築き上げてきたのである。

しかし、騒音にあふれた現代の劣悪な音環境を招いたのは、我々が環境の音に対する繊細な感受性を失いつつあるせいかも知れない。このあたりで、日本人がどの様に音環境と関わり、どの様な音感性、音文化を培ってきたのかを、問いなおしてみる必要があるのではなかろうか。それが、音環境のあり方を論じ、快適な音環境の創造へ至る道の、原点になり得るのである。

さまざまな社会の中で人間がどのような音を聞き取り、いかに意味づけ価値づけているかを、カナダの作曲家マリー・シェーファーは、「サウンドスケープ（音の風景）」という概念で包括的に捕らえ、音の持つ意味作用を重視した音環境研究の必要性を説いている。従来、音環境研究は、音のエネルギーで記述

される量的側面からなされてきたが、シェーファーの視点は、これまで顧みられることのなかった音環境の質的側面を重視した姿勢を与えてくれる。繊細な日本人の音感性を満足させる音環境のアメニティ（快適性）を論ずるためには、音環境の質的側面を、なおざりにしてはならない。

歳時記に詠み込まれた音環境

著者らのグループは、我々日本人と音の関わりを探るために、俳句に詠み込まれた音環境の分析に取り組んでいる。

作者の感動を季語に託し、出会ったもの、感じたものを素直に詠み込んだ俳句には、さまざまな状況で捕らえられた音環境が表現されている。俳句の中に表現されたサウンドスケープは、日本人の音感性を通して意味づけられ、音が風景の一要素として聞きなされたものである。それは、日常生活の中で、耳を傾け愛着を憶える音のコレクションにはほかならない。

さらに、俳句は五七五という凝縮された表現形式をとっているため、季節、地域、時刻といった環境要素が特定しやすく、音とその音が聞かれた状況が明示されている。また、俳句は、江戸時代から現代に至るまで、同一のスタイルを保ってきており、そこに詠み込

まれた音環境から、サウンドスケープの時代変遷を辿ることができる。

音と季節、時刻、場所との関わり

まず、俳句の中に表現されている音と、その音が聞かれた状況（コンテキスト）の関係を探ってみた。表1に示したのは、俳句の中に表現された音の種類とその音が聞かれた場所、時刻、季節の関係を示したものである。この表から、日本人がどういった状況でどういった音に耳を傾けてきたのかの、おおよその傾向をみることができる。最も頻度の高いものから、上位19の組合せが示されている。この調査では、「日本大歳時記」（講談社）中の、音に関する記述のある3,155の俳句を対象

表1 俳句に詠み込まれた音、時間、場所と季節の組合せ、およびその件数

季節	音	時間	場所	件数
夏	鳥	昼	山	54
春	鳥	昼	野	36
冬	生活	夜	家	35
夏	水	昼	川	33
夏	鳥	昼	野	26
秋	虫	夜	庭	26
夏	声	昼	家	23
秋	鳥	昼	山	23
冬	声	夜	家	23
秋	虫	夜	野	22
春	祭	昼	寺	21
秋	仕事	昼	田	20
春	水	昼	海	19
秋	声	昼	山	18
冬	鳥	昼	野	17
秋	虫	夜	家	15
秋	鳥	昼	野	15
春	水	昼	川	15
春	声	昼	野	15

とした。

最も頻度の高い組合せは、「夏、鳥、昼、山」で、全体の俳句の1.7%を占めている。夏山で出会う鳥の鳴き声は、生命感にあふれる豊かな自然環境を感じさせる。近代女性俳句の先駆者と称される杉田久女の、「罅（こだま）して山ほととぎすほしむまま」の句は、その典型例である。この句は、福岡県と大分県の県境にそびえる、修験道の霊山、「英彦山」で詠まれたものである。霊験あらたかな英彦山の雰囲気や、「音」で表現したところに、この句の持ち味がある。音で風景を味わうという、日本人の感性がなければ、この句は成立しない。久女は、この句によって、「日本新名勝俳句」の金賞を授賞している。

虫の鳴き声を愛でる習慣を持つ日本人にとって、すだく虫の音に耳を傾ける情景は、秋の夜にはかかせない。「秋、虫、夜」の組合せは、そのことを裏づけるものである。音が聞かれた場所は、「庭、野、家」に分散しているが、これら3箇所を総合すると、俳句数は、全体の約2%を占める。「鈴虫の声ふりこぼせ草の闇一園女」といった句に、その状況が表されている。

屋内で過ごす時間が多くなる冬には、身近な暮らしの中の音に耳を傾けたり、家族の話し声などによって、家庭の幸せを感じたりする。そんな冬のサウンドスケープを表したものが、「冬、生活、夜、家」の組合せである。「昔おもふしぐれ降る夜の鍋の音一鬼貫」の句にみられるように、冬の夜の「鍋の煮える音」は、家のぬくもりを感じさせる。日本人好みの音の一つであろう。数年前、テレビのCMで放送されていた、「冬の夜、会社帰りに友達と遊びに出かけようとしていたお父さん

を、電話で鍋の煮える音を聞かせて、家族のもとへ帰らせる」という状況は、そんな日本人の音感性を巧みに利用したものである。

「水の音」も日本人に好まれる音である。ウォーター・フロントでの波音や川のせせらぎといった、水が織りなすサウンドスケープは、さわやかな清涼感を感じさせてくれる。

「夏、水、昼、川」の組合せは、そんな状況を表したものである。「六月の風にのりくる瀬音あり久保田万太郎」といった句に、その状況が現れている。

俳句の中に詠み込まれている音は、ごくありきたりの、どこにでもあるような音ばかりである。しかし、その平凡な音が、我々の生活や自然環境といったコンテクストに意味づけられ、価値づけられたとき、我々の心の琴線に触れる。そして、ひとたび琴線に触れると、その音は、情景をより印象的なものに変容させるのである。

音と社会との関わり

「音」は、地域社会とも密接に結び付き、地域のシンボルとして、そこに暮らす人たちに愛されている例も多い。シェーファーは、共同体の人々に尊重され、シンボリックな意味を担っている音のことを、サウンドマークと呼んでいる。ロンドンのビックベン、京都の祇園囃子といったところが、サウンドマークの典型的な例である。

また、各地域には、目でその風景を楽しむだけでなく、耳で豊かなサウンドスケープが感じられるような、「音の名勝」と言えるような場所も存在する。さらに、地域社会の中で営まれる、祭りやイベントにおいても、音で演出された「音の行事」と呼んでいいよ

うなものも多い。「音の名勝」、「音の行事」は、我々が提唱した概念である。）

俳句の中にも、さまざまな、サウンドマーク、音の名勝、音の行事を読み取ることができる。そこで、我々は、角川版「ふるさと歳時記」九州編を対象として、そこに暮らす人たちが、そこを訪れる人たちと音との関わりを通して、九州の音文化について論じてみた。

まず、福岡県であるが、ここでの最大の音の行事は、5月初旬に福岡市で行われる九州最大の祭り、「博多どんたく」である。行列をなしながら、打ち鳴らされる杵子の音や、人々の賑わいの音は、「風にのりどんたく浮かればやしかな一浮風」に詠まれているように、博多中にみち溢れる。

太宰府の「観世音寺」の梵鐘の音は、地域を象徴するサウンドマークと言える。「筑紫いま観世音寺の除夜の鐘一飯島志つ子」に表されているように、この鐘の音は、筑紫野の大晦日のサウンドスケープの中核を成す。除夜の鐘は、日本人にとって特別な意味を持つ。行く年を思い、来る年に心を新たにす、そんな心のよりどころになっているのである。この鐘は、その美しい音色により、国宝に指定されている。

佐賀県最大の音の名勝は、「有明海」である。有明海の広大な干潟には、多くの魚介類、それを餌とする鳥類をはじめ、多くの生物が生息している。これらの生物の音を中心に、有明海は豊かなサウンドスケープを形成している。「水鶏なく海が残してゆきし沼一鶴丸白路」は、そんな干潟の一風景を表す。

長崎県の最も代表的なサウンドマークは、「教会の鐘の音」である。迫害されつつも、多くの人々がキリストの教えを守ってきた歴

佐賀県

何の音が聞かれたか	場所
海鳴り、海苔舟が進む音、人の声、風の静けさ、秋の声、雲雀、鶴、時鳥、風音、水鶏、牡蠣を打つ音、櫓の音	有明海
多久聖廟祝祭、鶏	多久市
枯れ木を折る音、人の声、詠り、山笑う、虫の羽音、蟬	嬉野町
土をつく音、鶯、鸚鵡の声、祭笛、笑い	有田市
浮立、鈴、薫が燃える音、蟬、伊万里トンテントン祭での音	伊万里市
「秋の声」は秋の情趣を感じさせる天地万象の音で、「山笑う」は春に生命感溢れる山の自然をイメージの音で表した季語である。	

長崎県

何の音が聞かれたか	場所
潮騒、怒涛、つくつく法師、蛙、囀り	平戸
カナブンの羽音、囀、吠、雁、雉、鐘、雷	大浦天主堂
さざ波の音、鐘、蟬、土鈴、爆竹	崇福寺
鐘、轟打ちの音、百舌、静けさ	浦上天主堂
	善丁谷

熊本県

何の音が聞かれたか	場所
穂やかかさ、銀杏の葉が落ちる音、市電	熊本市
夜回り、電話	
御田祭の音、神楽、田圃の音、こたま、鎖まり	阿蘇
さざめき、虫、雲雀、郭公、鴉、風、地鳴り、雷、鎖まり、山笑う、馬、地鳴り	阿蘇火口
静けさ、雲雀、地鳴り	阿蘇五岳
話、詠り、蟬、潮音	人吉市

鹿児島県

何の音が聞かれたか	場所
鶴、鴨、猫	出水市
鶴、鳥、ひしめき（イメージの音）、声	荒崎鶴菜地
騒音、波音、蛙、時鳥	坊津
波音、静寂、風、鶯、雀、雀、地鳴り	鹿児島市
声、鎖まり、風の静けさ、木枯らし	
火山灰、轟、山鳴り、地鳴り、噴水	桜島

福岡県

場所	何の音が聞かれたか
玄海	笛、海鳴り、潮騒、怒涛、静寂
博多どんたく	囀り、人の声、三味線、杓子を叩く音
博多	博多ホッペン、博多紙團山笠、詠り、熊蟬、帯が鳴る、秋の虫
箱崎宮	夏越祭、玉せせり、放生会での音
篠栗四国霊場	鈴、滝、蟬、時鳥、囀り
観世音寺	響が瓦に当たる音、雷、鐘、落ち葉はききの音、囀り、馬の鳴き声
太宰府天満宮	人の声、鬼すべ、鶯音などの行事での音、風鈴、鶯笛
都府楼跡	威銃、雲雀、蛙、秋の虫、人の声
筑後川	鳥威し、静寂、雷、野焼きの音、潮音
英彦山	人の声、こたま、蟬、時鳥を代表とする夏鳥、むささび

大分県

場所	何の音が聞かれたか
宇佐神宮	神楽、宇佐祭の音、静寂、蟬、蛙
耶馬溪	潮音、こたま、人の声、時鳥、大瑠璃
臼杵磨崖神社	鷹、蛙、雷
別府湾	仏の響き（イメージ）、鶯、雲雀、人の声
別府温泉	風の静けさ、静けさ
由布岳	霧笛、静けさ、山笑う
由布院温泉	木がこごうと枯れる音、蟬、雲雀、時鳥、雉
日田市(小瀬田)	秋の声、朝、霧笛
	土をつく音、製鉄所の音、鶯

宮崎県

場所	何の音が聞かれたか
高千穂峡	神楽、神楽笛、神楽太鼓、鶏
椎葉村	鳥の地鳴き、鈴、酒
青島	鳴、鶯、蛙、神楽、蟬、神橋節
日南海岸	海鳴り、潮騒、蟬、風の静けさ
西都原古墳群	玉砂利の擦れる音、声
緑町	潮騒、波音、風の静けさ、椋鳥、鶯
関之尾滝	威銃、鶯、時鳥、雉、蛙、太鼓
	声、蟬、鯉、飛行機の音
	滝音

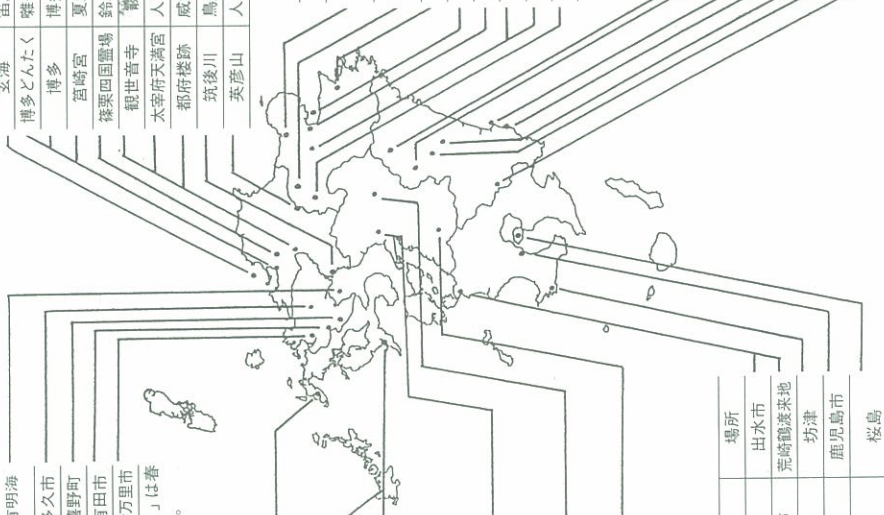


図 1 九州各地の名勝、音の行事

史を持つ長崎の人たちにとって、教会の鐘の音は、地域社会を象徴する音としてふさわしい。「聖鐘の祈り野に満つ種おろしー朝倉和江」の句は、教会の鐘の音が人々の生活の中に根付いている様子を、よく表現している。

長崎には、ユニークな音の行事、「ペーロン」がある。ペーロンは、中国伝来の船競漕であるが、太鼓打ち、銅鐸叩きなどが同乗し、にぎやかなレースを展開する。応援合戦も、華やかである。「ペーロンや試し漕ぐにも太鼓打ちー五十嵐哲也」は、そんなレースの一コマを詠み込んだものである。

大分県の代表的な音の名勝は、「耶馬溪」、「宇佐神社」である。これらの地域においては、鳥の声や虫の音などが多く詠み込まれており、豊かな自然音によるサウンドスケープが形成されている。「俄（にわか）なる大瑠璃（るり）の声耶馬探しー大橋敦子」、「百段を押しよせてくる蟬時雨ー香下六子」などが、代表句としてあげられる。

熊本県最大の音の名勝は、世界最大級のカルデラを持つ、「阿蘇山」である。「地鳴りして阿蘇の火口の斑雪ー衛藤圭子」に詠み込まれている、「阿蘇の地鳴り」は、この地方のサウンドマークでもある。逆に、阿蘇山の鎮まりによってもたらされる静寂感も、「糞虫の振子や阿蘇の鎮まれるー青島俊峰」のように俳句の素材になっている点も、興味深い。それだけ、この地域社会において、阿蘇山の存在が大きいのであろう。

宮崎県の代表的な音の行事は、高千穂峡で営まれる「夜神楽」である。これは、民家や社殿を祭場とし、太鼓、笛、銅拍子の伴奏で繰り広げられる、出雲系の神楽の一種である。夜神楽は、「夜神楽や今舞いし人太鼓つー楨田

好甫」に詠み込まれているように、地域住民と密着した行事になっている。

鹿児島県の「桜島」も、音の名勝として、阿蘇山に負けてはいない。「大歳止めを打ちし噴火音ー佐藤恵美子」に詠み込まれているように、桜島の豪快な噴火音は、薩摩隼人の象徴としてふさわしいサウンドマークである。また、和泉市荒崎も、忘れてはならない音の名勝で、毎冬多くの鶴がここを訪れる。鶴の鳴き声は、この地域に暮らす人たちにとって、サウンドマークとなっている。「不知火の闇に目覚めて鶴の声ー平尾みさお」は、冬の夜の生活の一コマを詠み込んだもので、「鶴の声」が郷愁を誘う。

以上のように、俳句に詠み込まれた音から、九州各地の特徴的なサウンドスケープを捕らえてみた。図1に、ここで紹介できなかったものも含めた、各県の音の名勝、行事を示す。我々は、実にバラエティに富んだ、豊かな音環境に囲まれて生活している。こういった音を意識し、保全していこうとすることが、音に対する豊かな感受性を育むのである。

さらに、ここで示されたサウンドマーク、音の名勝、音の行事は、村おこし、町おこしといったことを考えたときの、地域の音のシンボルとして生かせる、「音」資源でもある。今後、地域開発レベルでのデザイン活動においても、もっと「音」を積極的に取り込むことを、考えてもいいのではないだろうか。

サウンドスケープの時代変遷

技術の進歩や生活様式の変化にともなって、我々を取り囲む音環境も時代と共に変化してきている。音環境の時代変遷は、俳句に詠み込まれた世界からも読み取ることができる。

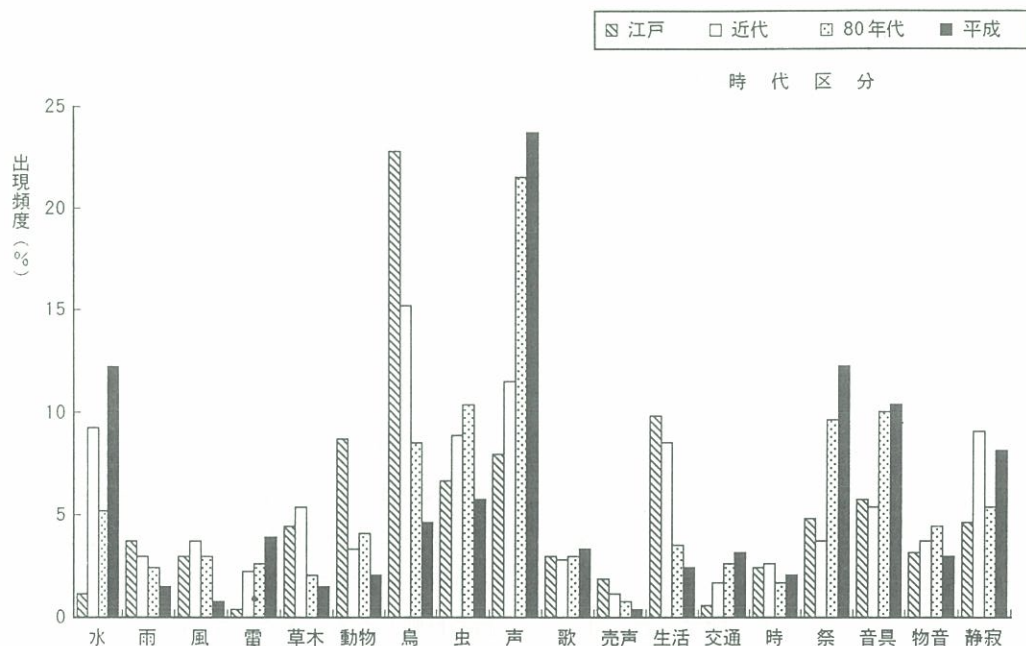


図2 俳句に詠み込まれた各音の出現頻度 (%) の時代変遷

そこには、音環境自体の変化と共に、日本人の音に対する感性の変化も映し出されている。我々は、前述の「日本大歳時記」に、1981年から1991年の「朝日俳壇」を資料に加え、俳句の中から読み取れる音環境の時代変遷を辿ってみた。

江戸時代から現在に至るまでの、俳句に詠み込まれた音環境の時代変遷を探ると、大きく四つの時代に区分される。それは、江戸時代、近代(明治、大正、昭和)、1980年代、そして平成である。江戸時代から近代を経て1980年代に至るまではゆっくりと音環境が変化しているのに対して、1980年代から平成にかけての音環境の変化は急激である。

図2に、各時代毎に、俳句の中に詠み込まれたさまざまな音の相対頻度を示す。この図から、時代の流れの中で、どのような音が我々

の回りから姿を消していったのか、逆に、どのような音が意識されやすくなってきたのかを、読み取ることができる。減少してきた音は、「鳥の鳴き声(鳥)」、「雨音(雨)」、「物売りの声(売声)」などである。対照的に、「雷の音(雷)」、「話し声(声)」そして、車の音や船の汽笛などの「交通に関わる音(交通)」は、時代と共に増加してきた。

減少してきた音の共通点は、「季節感を醸し出すような音である」ことである。例えば、「鳥の鳴き声」は、「うぐひすの音づよになりし二三日一去来」という句に見られるように、季節の象徴としての意味を担っている。実際、季語に取りあげられている鳥も多い。また、「雨音」が詠まれている句は、梅雨時の激しい雨音とか秋の穏やかな雨音といった、季節による音の違いによって、俳句として成立し

ている。「川音に勝る雨音梅雨探し—成瀬正俊」と、「邯鄲(かんたん)のそれより細き雨音に—山地曙子」の句が、各々の典型的な例である。そして、永井荷風が、「蟲の聲」という随筆に、「季節のかわり行くごとに、その季節に必要な品物を売りに来た行商人の声、東京という都会の生活に固有の情趣を帯びさせた」と述べているように、「物売りの声」は、街での季節観を形成する重要な要素であった。このような、季節感を醸し出すような音は、時代と共に姿を消すか、気づきににくくなってきているのである。

逆に、時代と共に増えてきた音の共通点を考えてみると、季節との関わりが薄いことが分かる。「話し声」と「交通に関する音」は、音自体が直接的に季節を象徴することはない。また、「雷の音」については、「春雷の耳より覚めてをりにけり—松原かつこ」や、「雷に覚めて遅刻をまぬがれり—糸賀百代」のように、突然の大音響に驚いた様子を描いた句がほとんどである。これらにおいて、「雷」自体は季語であるものの、詠まれている状況は、季節とはなんら関係のないものである。

江戸時代や近代においては、音は、四季折々の変化を伝える媒介として、祭りや町の賑わいの象徴として、季節や地域と密接に関わっていた。日本人は、音それぞれの持っている季節感や地域性を敏感に読み取り、そこから情趣を感じとる感性を育ててきたのである。しかし、時の流れとともに、日本のサウンドスケープは、季節感、地域性といった文脈を失い、我々は、音から情趣を味わうことができなくなりつつあるのかも知れない。

騒音にあふれた現代の音環境に生活する我々は、次の世代に対しどのような音感性、音文

化を残し、伝えることができるのであろうか？人工的な音環境に適応した、新たな美意識を培っているかも知れない。あるいは、英知をもって、自然環境の保全に務めるのであろうか。次世代の人々が過去の音環境を振り返って見たとき、我々の生活している音環境についてどのように評価するのかも、興味あるところである。

むすび

俳句の中に詠み込まれた音環境、そこには、日本人の音の心象風景が広がっている。そこは、まさに、「感性のインデックス」と呼ぶにふさわしい世界で、日本人の音に対する美意識を反映したものとなっている。

我々の研究は、俳句という世界最小の文学から、「音」を通して、人間と自然環境や社会の関係を考える契機を与える。17文字の小宇宙から、地球規模の環境問題を論ずる、そんな「でっかい小さい」研究に発展できたらと、願いを込めて、筆を置く。

本稿は、九州芸術工科大学の、前田耕造、永幡幸司、山崎隆志君の卒論、修論、並びに、〈参考文献〉に示す研究報告に基づいて、まとめたものである。本稿が、我々の研究に興味を持っていただけるきっかけになったら、幸いである。

参考文献

前田耕造、岩宮眞一郎、歳時記に詠み込まれた音環境(1)—季節、地域、時刻とサウンドスケープの関わりについて—、聴覚研究会資料H-92-61(音楽音響研究会資料MA92-19)、1992。

永幡幸司、前田耕造、岩宮眞一郎、歳時記

に詠み込まれた音環境(2)ーサウンドスケープの時代変遷ー, 聴覚研究会資料H-92-62(音楽音響研究会資料MA92-20), 1992.

前田耕造, 岩宮眞一郎, 歳時記に詠み込まれた音環境の統計的分析, 日本音響学会誌, 49巻7号, 493-496, 1993.

岩宮眞一郎, 快適な音環境ーサウンドスケープの「聴」点からー, 現代のエスプリ315号, 至文堂, 88-95, 1993.

岩宮眞一郎, 前田耕造, 永幡幸司, 音の原風景を求めてー歳時記に詠み込まれた音環境ー, 西日本新聞, 1993.12.7-9.

山崎隆志, 前田耕造, 永幡幸司, 岩宮眞一郎, 歳時記に詠み込まれた九州の音環境ーサウンドマークで巡る九州の旅ー, 騒音研究会資料N-94-10, 1994.

著者略歴

氏名: Shin-ichiro Imamiya

学歴: 昭和52年3月 九州芸術工科大学芸術工学専攻科修了(音響設計専攻)

平成2年3月 工学博士(東北大学)

職歴: 昭和52年5月 九州芸術工科大学音響設計学科助手(音響構成講座)

平成3年1月 九州芸術工科大学音響設計学科助教授(音響環境学講座)現在に至る。

著書: 平成元年11月 イメージの世界(共著) 井上書院

平成2年6月 人間の許容限界ハンドブック(共著) 朝倉書店

平成6年1月 新編 感覚・知覚心理学ハンドブック(共著) 誠心書房

賞: 平成5年3月 日本音響学会 佐藤論文賞
研究: 音響心理, 音色評価, 音と映像の相互作用,

サウンドスケープなどの研究に従事。

